

てみぐるしきなり、總別茶の湯に手上手浦山しからぬ物なり、手くら品玉取をみる心地せり、又功者もうとましきものなり、あぶらじみ玄たるもむさげあり、只浦山しきは目利の人、作意ある人、是數寄の根本たるべし。

〔細川茶湯之書〕^上茶之湯數奇道に習なし、上手のとりおこなふをにせるこそ其身も面白、然れ共習なければ、にせ得る事不叶、唯面々器用次第、上手のほまれを諸人にもちひほめらる、也、都に數奇者多しといへど、其時の師匠になれそひ、色々さまざまに數奇道を執行するといへども、さながらおしゆるといふ子細なきによりて、習事もなした、師のおこなへるを似せ、また眼前の事のみうつすといへども、上手下手の差別わからず、其年の口切の時とりいだす道具、作事、料理以下獻立を、年の暮まで用る、日夜朝暮たねなくするを數奇者といふ、或は能道具を取出し、其身の覺悟、一心不亂に奇麗すきして、萬事にわだかまらず、涌淪に老若の隔なく、能人の目明のつよきこそ上手とはいへり、先年利休茶之湯の師となり、弟子數千人餘これありといへ共、上手と成弟子は、五人十人に玄かず、去ながら高もいやしきも、老若ともに、當世のはやりものなるに、舊先少也、玄かるべきため如此なり、

〔雲萍雜志〕^二茶道を好むもの、他の手前をも辨へなく、わが習たる義のみ心得、これこそはわが流になくて、叶はぬ品なりなど、無益の器を高料にもとめ飾おきたるは、ふる道具店にもひとしく、見るさへなかく、にうるさがるべし、又利休居士が詞にも、貴き價の器物を愛するは、心利欲に走るがゆゑなり、缺たる摺鉢にても、時の間に合ふを茶道の本意とすといへり、數奇屋咄といふものにも、主人家居と道具に自負し、客にたのみて云けるは、わが好けるすきやのうちに、何によりたること、はなしに、よろしからざるものあらば、詞に玄たがひはぶくべし、少しも遠慮し給はずいひ給はれとありければ、客は諂なき人にて、家といひ器といひ行届かざる所もなけ